真杉静枝文学に語られる「壁」
――「烏秋」、「母の傑作」の主人公たち――

范　　淑　文*

1．はじめに

真杉静枝は、1900年11月生まれ、３歳の時に父真杉千里が神官として渡台することとなり一家で台湾に移住した。17歳の秋、母親の決定で後に高雄市に近い旧城駅長になる13歳も年上の藤井熊左衛門と結婚した。しかし、結婚４年目、彼女は自らその結婚生活から逃れ、大阪の祖父母の所に頼った。21歳の若さであった。その後、静枝は武者小路実篤と知り合ったことが切っ掛けで、文学創作を始め、1927年に処女作「駅長の若き妻」を発表したのを契機に文壇に登場、文学創作の人生の道を歩み始めた。1934年ごろ、中村地平と東京で出会い、やがて二人は同棲するようになったが、６年程で別れた。1942年に中山義秀と再婚した静枝は、作家、妻以外に、義秀の連れ子の母の役も務めていたが、この結婚も長くは続かず、1946年に義秀と離別した。[1]

子供の頃からの台湾生活や、その後の日本からの度重なる台湾訪問、また波乱万丈な恋愛関係などの人生ゆえであろうか、真杉静枝の文学作品には台湾を題材とするものが大半を占めており、また女性に焦点を置いた作品も目立っている。ただ、その過激な恋愛関係からもたらされた厳しい批判の眼差しのためだろうか、日本の文壇や研究者の間では真杉文学はこれまであまり注目されてこなかった[2]。また、台湾文学史研究の先駆者である葉石濤は「情熱的で奔放な血が流れている真杉はこうした貧しくて辺鄙な田舎生活には耐え切れず、家出をして「内地」へ逃れ、作家になった。が、何人もの男性と付き合った関係で、評判が悪かった。総じていえば、彼女は大した作品を書いていなかった。文学創作よりスキャンダルの方がよく知られている。」[3]（日本語訳筆者、以下同。）と批判している。極めて苛烈な批判であるが、このように日本本土のみならず、台湾でも悪評だったほど真杉文学の価値は認められなかったのである。

2000年以降、真杉文学が徐々に注目され、日本では高良留美子[4]、台湾では林雪星[5]、阮斐娜（フェイ・阮・クリーマン）[6]、李文茹[7]、邱雅芳[8]、呉佩珍[9]などの真杉文学研究者が続出し、2007年より真杉文学研究が盛んになってきた。邱雅芳は「「南方」は堕落した植民地の隠喩であると共に女性の青春を葬る墓でもあろう。」[10]と「南方の墓」を捉えている。李文茹は、戦時、女性なりに男性社会のシステムに参与し貢献する姿勢を構えていたと、真杉の女性描写について言及している[11]。最も多く研究成果を上げている呉佩珍は、家父長制度への批判、植民地政策の一環などの論点のほか、真杉は台湾から逃れようとしながら、一方で、台湾が彼女の創作の原風景だという真杉の心にある葛藤をも指摘している[12]。それらの研究から（1）論点（2）研究作品、との二点について、以下のような特徴がうかがえる。（1）本島人との結婚問題や日本語教育問題などの植民地政策、また家父長制度による女性への圧迫などの問題に集中しているが、李氏と邱氏は批判的な捉え方に傾いてい

＊国立台湾大学教授

る。呉氏の研究にも批判的な姿勢を構えているが、已むを得ない立場による創作だと真杉の生立ちを配慮に入れた見解も見せている。一方、高良留美子は、真杉の紀行文の「陰影のある」部分に注目し、皮肉的な表現を用いて皇民化政策の失敗を指摘している点を見出している[13]。(2) 上掲の研究は紀行文『南方紀行』、「南方の墓」及び『ことづけ』に収録されている「南方の言葉」「リオン・ハヨンの谿」「女の年齢」などの作品に集中している。

以上の先行研究を踏まえたうえ、小稿では、「壁」というテーマを前提にして、あまり注目されていなかった「烏秋」と、それと同じく女性の結婚や人生を姉妹の目を通して見詰めることが描かれている「母の傑作」との二つの作品に焦点を据え、女性らが直面している壁、それを如何にこえるのかを探ってみることを主旨とする。

2.「母の傑作」に見られる「壁」

「母の傑作」は、1940年に発表された短編である。台湾から飛び出して大都会東京で頑張っている主人公桂子は、台湾から会いに来る妹を迎える。姉妹は12年振りの再会であるが、恋人平次とは相手の家庭の事情で好ましくない状況になっていた桂子は、輝しい姿を見せられないのを悔みながらも妹と会った瞬間に、見すぼらしい妹に冷たい態度を隠せなかった。そうした雰囲気の中、思わず、台湾を飛び出した時母親から送られてきた手紙にあった言葉を思い浮かべた。「お前と云ふ娘には、大した失敗をしたから、妹にはできるだけのことをして、幸福な普通の女の生活をさせるつもりです。妹娘だけは、私の「母の傑作」にするつもりです」[14]（P16）という内容である。その言葉への皮肉であろうか、見すぼらしい妹の姿を目の前にしている桂子は、「これがその傑作の姿かしら。」と、疑う気にならずにはいられなかった。久しぶりに会ったにもかかわらず、姉妹は互いに本当の気持ちを明かすことなく妹は寂しく帰途の汽車に乗り、一方の桂子の方は恋人の平次に親父に決められた結婚で二人がとうとう別れることになるというところでストーリーは終わっている。

台湾の「土人の子供の公學校の先生をし」ながら、細々と二人の子供を養育している未亡人である妹が遥々と東京まで来たのは、姉の輝かしい姿を一目見たいという願望のほかに、勿論二人でたっぷり心を語り合うのが主な目的であったが、妹の東京滞在中に姉は晴れる顔を見せることはなかった。休みの一日だけを妹のために使おうと思い、桂子が江の島へ妹を連れて行った時でさえも、姉妹のように労わる言葉はなく、距離を置いていた。自分の苦労をたっぷり訴えて甘えるつもりでいた妹は、姉の冷たさを感じたため、下宿のおばさんに、お姉さんに存分に愚痴でもこぼして帰りなさいと勧められたとき、「お姉さんは、東京で一人ぼつちで働いていらつしやるのですものね。私は、何も話しませんよ。明るい方のことしか……」（P21）と返事をした。また、「何一つお姉さんに氣にかけて頂くやうなことありませんのよ」（P19）という言葉からでも、妹は姉に甘えてはいけないと自覚したことがうかがえよう。寂しくて悲しい妹は自分の苦悩を抑え、再び暗い生活に戻ろうという心境で帰途についたのである。

東京駅のホームに着いた時の妹の姿と帰りの姿が全く異なっている点を見落としてはなるまい。先ずは東京に着いた時の妹の様子を見てみよう。

> いいわ、別に他人のところへ來たのではない、お姉さんのところだもの、といふやうな氣持にのりかへて、甘えたやうな心にもなつてみたりしてゐるやうであつた。（中略）わざと手足を無意味に活潑げに動かしてみたりして、自分の服装のまづしさを、いぢけさせまいと氣を張つてゐるやうであつた。（P14、15）

恥ずかしいが、会う相手が「お姉さん」であるため、妹はその気まずさ、恥ずかしさを隠そうと、「わざと手足を無意味に活潑げに動かし」たりし

ている。姉に甘えている気持ちは十分にうかがえる。しかし、その帰りはどんな姿であろうか。その日には桂子は恋人の平次と約束があるため、妹は一人でホームへ赴いた。結局、平次が何かの用事で約束の場所に姿を現さなかったため、桂子は諦めて駅に駆けつけたら、一人で切符を買っている妹の姿が眼に入った。「感動のない横顔のままでゐた。」（P26）更に注目したいのは、妹から送られてきた葉書、汽車で書いた葉書である。妹と同じ未亡人である下宿の叔母さん宛ての葉書と、姉桂子宛ての葉書との二通である。

> これからの手紙がどんなにか書きよい。――といふやうなことしかかいてなくて、下宿の叔母さんの方には、
> 「――汽車が新橋あたりを過ぎる時には、悲しくて、悲してく、これがなつかしい　お姉さんのゐる東京の灯の見納めだと思ふのに、泪が出て泪が出て、どうしても外をみることができませんでした」と書いてあつた。（P29）（下線部筆者）

実の姉より他人である、下宿の叔母さん宛ての葉書には心を語っているような内容であるが、一方、姉宛ての葉書には「これからの手紙はどんなにか書きよい」という一行しかなかった。この二通の葉書からでは、二度と姉に会いに来ることはない、今後、姉と妹との関係を如何に定めればよいか、という妹の悲しみはどれほど深いものだったかがうかがえよう。物語はこの二通の葉書の内容で終わっていることは意味深い。

これは姉桂子の妹への態度と深く関わっている。台湾での結婚の失敗から東京に飛び出した桂子は、勿論東京ではまず立派な結婚ができるように頑張るのは納得できよう。会社の若旦那である平次という恋人ができたところまではよかった。が、結婚という段階になると現実に向き合わざるを得なくなったのである。平次は自分の愛している人と結婚できず、父親に決められた相手との結婚を拒むことができない事態になったのである。そのような大切な時期に、植民地である台湾から血が繋がっている妹の現れは桂子にとっては、勿論好ましくないことであろう。妹の出現によって、桂子には台湾から来たというレッテルが貼られ、平次との結婚にマイナス的な条件になるのは言うまでもない。桂子がそのような妹と距離を無意識に置き、心を開くはずはないという冷たい態度に妹は気づいたのである。ウキウキして大きな期待を抱いて東京の姉に会いに来た妹は、来た時とはすっかり変わり、「感動のない」顔で姉と別れるはめになったのである。

それまでの妹に対する態度、それがどれほど妹を傷つけたかも気づかなかった桂子はそこで自分の内面にある「壁」、内地人ではなく、台湾出身という所属を切り捨てようとする苦悩、内面と初めて向き合ったのである。そうした妹の葉書の言葉で物語が終わっていることは桂子がその「壁」を越える余裕がないことを暗示しているのであろう。

３．「烏秋」に見られる主人公の「壁」

1941年に出版された『ことづけ』に収録されている「烏秋」は初出誌が不明である。が、「母の傑作」では「今は二人の子供を兩親にあづけて、土人の子供の公學校の先生をしてゐる。」（P4）という桂子の妹の身分の設定と、「烏秋」では三人の子供の母親になっているという主人公の妹の設定を考えれば、「母の傑作」より「烏秋」の方が後の作品と考えるのが妥当であろう。こうした状況を念頭において「烏秋」を見ていきたい。

作品の内容からでは、「烏秋」は、1940年暮、陸軍報道部の南支派遣軍慰問団の一員として、広東を訪問した帰りに台湾に寄って滞在した真杉自身の経験を題材にして書かれた作品と思われる。広東訪問後、台湾に寄って南部に住んでいる両親と妹に会いに行く主人公桐野八重の眼を通して、故郷の様子が語られる、というのがこの作品

の大体の内容である。駅まで迎えに来てくれた母親の姿や「本島人」に対して神社での儀式用の音楽を熱心に教育している父親の姿、日本語を勉強している「本島人」の女性たちの姿、そしてなによりも公学校で日本語の教師の仕事に携わりながら、一人で三人の子供を養育している妹加納照枝の苦労している姿が語りの焦点となっている。

「日本語教育、神道を通して日本精神の徹底、改姓名運動、皇民化政策、南方進出など盛り沢山でもある。」[15]という河原功の指摘のように「烏秋」を色々な視点から読むことができる。また、主人公が帰省の汽車に乗っている時に、内地から写生に来たらしい乗客が車窓から見た烏秋という黒い鳥、そしてその鳥についてのしつこい説明から、日本対中国などの列強という当時の日本の比喩と読み取れないこともないが、妹と子供の関係、妹の心境などに焦点を合わせている語りから、「母の傑作」とは姉妹作のような作品として読むことも出来よう。

「烏秋」では、妹の加納照枝は公学校での仕事が終わって帰ってきたら、一家の料理や子供の教育などに神経を使わなければならない、所謂キャリアウーマンである。妹の家庭での様子は以下のように語られている。

> 「八重に醜態をみせまいとして、照枝と、一郎とが廊下から、戸外へ逃げ出してしまつたのよ」（母親からの説明、筆者注）（中略）「八重子伯母さんが、お客様に來てゐる間だけでも、兄ちやん、お母ちやんの云ふことをきくつて約束だつたんだけど……」
> と、そばから、次男の二郎も不安さうな聲を出してゐる。[16]（P65、66）

長男は母親が用意してくれた服を「そんなもん學校へ着ていかれん」と怒鳴ったり、夕飯に出されているおかずに子供が文句を言ったりしている。姉にそんな惨めなところを見せたくなく、八重が家を飛び出し、母親を怒らせた長男も母親の後を追っていったシーンである。反抗期の長男をはじめ子供たちの扱いで照枝が如何に苦しんでいるかがうかがえよう。それでも姉には隠そうと努力している。そして、八重が探しに行き、ようやく製糖会社の近くで照枝と長男の親子二人を見つけ出した。その時に、「お姉さん、をかしげな句が一つできましたよ。――烏秋に似て猛けかれと母ごころ」という照枝の言葉は、そうした環境に置かれた未亡人の心境や生き方を十分に反映している。

烏秋という鳥については、姉である八重が故郷へ向かう汽車の中でも語られている。内地から写生に来ていると見える「内地」人乗客たちが車窓から烏秋を見かけた瞬間、「烈しい鳥だ。日本では、臺灣にしかゐない。何しろ、空を飛びながら、鷹に挑びつくんだからね。あの小さい體で……」、「鷹にとびついたからには、その鷹が口にくはへてゐる獲ものをはなすまでは、挑びかかつていつてはなれないんだ」（P51）と烏秋の特徴について必要以上に詳しく語っている。烏秋は困難や目的達成まで努力し続ける強さの暗喩とされているのは明らかであろう。照枝が作った句「烏秋に似て猛けかれと母ごころ」を考え合わせれば、未開墾の植民地である台湾で三人の子供を抱えている、並大抵ではないその苦労に負けるまい、照枝の強く身構えている姿の暗喩とも読み取れよう。

照枝と子供たちとのもめ事について、「八重に醜態をみせまい」という母親が八重に説明したところを見落としてはならない。母親の決定に従い、結婚して間もなく夫に死なれて、三人の子供の養育に苦労している照枝の「醜態」である。片や姉は母親の決めた結婚生活から東京に逃れ、自由の身として頑張っている女性、帰郷する前の広東訪問の描写からでは、輝かしく生活をしていることは明らかであろう。失敗に近い結婚、自由が奪われた生活、植民地である台湾という貧しい生活の場など、一つも自慢できるものがない立場に立たされている照枝は、姉にそのような「醜態」を隠そうとせずにはいられない。自ら挙げた句「烏秋に似て猛けかれと母ごころ」の通り、姉の前に少

し意地を張っている彼女の心境も感じられよう。そのような意地――烏秋と同じように強く構えている姿勢――は、彼女にとっての「壁」、姉妹の情を語る障壁であろう。

４.「母の傑作」から「烏秋」へ

台湾から東京へと飛び出した姉と、台湾生まれで台湾で結婚し未亡人になっている妹、という姉妹の関係を描いた内容からでは、「母の傑作」と「烏秋」は姉妹作と見なしてもよかろう。以上の考察から、まずそれぞれの作品に主人公の心の「壁」は次のように纏めることが出来る。

・「母の傑作」では、姉の桂子が恋人である平次との結婚話がうまく運ぶように、その結婚にとっては不利な条件になる台湾とのつながりを無意識に切ろうと考え、遥々と会いに来た妹と距離を置き、冷たく接していた。東京に来た時の、滑稽と思われるほど興奮した顔とは全く異なり、帰りには「感動のない」という妹の悲しい顔を見て、桂子は如何に妹を深く傷つけたか、台湾につながるレッテルを拒んでいた自分の中にある「壁」に気付いた、つまりここで姉は自己省察ができたのである。

・「烏秋」では、姉（八重）の視点を通して台湾で苦労している未亡人である妹（照枝）の姿が語られている。母親の決めた結婚をし、植民地台湾でずっと生活している照枝は成功とは言えない結婚、更に三人の子どもの養育の惨めな様子を姉に隠そうとするのは、彼女の心の中の「壁」といえよう。内地⇔植民地、自由⇔不自由、輝かしい姿⇔生活に喘ぐ「醜態」という姉と妹との対照的な立場で、照枝が姉妹の情を語る前に、烏秋のように強く身構えずにはいられなかったのであろう。一方、姉の方は違う姿勢を見せている。子供とのもめごとで家を飛び出した妹照枝を姉が探しに出掛けた時の描写から、「壁」を崩そうとする姿勢が見える。妹の名前「照枝！」ではなく、公学校の学生の真似をして、「加納先生！」と、ふざけて呼んだ姉八重の姿は、「母の傑作」に描かれている東京の桂子とは異なり、余裕のある、優しい面が溢れている、頼りになる姉としての姿である。

「母の傑作」に描かれている、揺れている自分の所属――台湾から内地へという所属――の願望に苦悩していた姉（桂子）が「烏秋」になると、故郷の台湾に妹に会いに来たことは、その「壁」を越えたと言えよう。姉妹であることをここで再確認、姉妹の情を新たに語ることができたからである。「母の傑作」と「烏秋」を姉妹作として読めば、このように前作で築かれていた「壁」をそのあとの「烏秋」では、姉の故郷帰りや傷つけた妹に会ったことを通して、その「壁」を越えたという仕組みを見出すことができるのである。

注

1　『日本植民地文学精選集019【台湾編】７』（監修・解説：河原功、2000.09、ゆまに書房）を参照。

2　管見では、2000年までには、蜂矢宣朗（1997.6）「真杉静枝と窪川稲子――『南方紀行』と『臺灣の旅』――」（『天理台湾学会年報』第６号、天理台湾学会）と、台湾の歴史研究者である周婉窈（1991.1）の〈「莎勇之鐘」的故事及其波瀾〉（《歴史月刊》第46期、歴史月刊雑誌社）との二点しか見当たらなかった。

3　葉石濤（1994.8）《展望臺灣文學》臺北九歌出版社、213-214頁。

4　高良留美子（2005.7）「真杉静枝が書いた台湾陰影のあるエッセイ」『植民地文化研究』第４号、植民地文化学会及び、高良留美子（2006.7）「真杉静江「南方の言葉」を読む　本島人と台湾語への愛」『植民地文化研究』第５号、植民地文化学会

5　林雪星（2003.1）『日本女性作家の描いた中国』東呉大学出版

6　阮斐娜（2007.6）「目的地台灣! ――日本殖民時期旅行書寫中的台灣建構」『台灣文學學報』第10期、國立政治大學台灣文學研究所

7　李文茹（2008.6）「殖民地．戰爭．女性――探討戰時真杉靜枝臺灣作品」『台灣文學學報』第12期、國立政治大學台灣文學研究所

8　邱雅芳（2010.12）「殖民地新故鄉――以真杉静枝「南方之墓」、「南方的語言」的臺灣意象為中心」『文史臺灣學報』第二期、國立臺北教育大學台灣文化

研究所

9　吳佩珍（2008.6）「皇民化時期的語言政策與內台結婚問題――以真杉靜枝「南方的語言」為中心」『台灣文學學報』第12期、國立政治大學台灣文學研究所／吳佩珍（2010.12）「台灣皇民化時期官方宣傳的建構與虛實：論真杉靜枝「沙韻之鐘」翻案作品」『台灣文學學報』第17期、國立政治大學台灣文學研究所／吳佩珍（2013.6）「「故鄉」／「異鄉」:〈女兒〉、「某個女人的生平」中的「殖民地台灣」記號」『台灣文學學報』第22期、國立政治大學台灣文學研究所／吳佩珍（2013.9）『台灣與東亞 真杉靜枝與殖民地台灣』（台北）聯經出版股份有限公司

10　邱雅芳、同上掲注８、72頁

11　同上掲注７。

12　吳佩珍（2013.9）『台灣與東亞　真杉靜枝與殖民地台灣』（台北）聯經出版

13　「明らかに検閲への配慮から、あからさまには表現されず、すぐに日本の植民地政策を賛美する言辞によって打ち消されるのだが、真杉の観察はしばしば日本の皇民化政策への皮肉な感想や、その失敗をあかすような事実さえ導きだしている。」高良留美子（2005.7）「真杉静枝が書いた台湾　陰影のあるエッセイ」『植民地文化研究』第４号、植民地文化学会、P76

14　「母の傑作」の引用は『万葉をとめ』（1946.12、京都印書館）に収録されたものによる。以下同。

15　（2000.9）『ことづけ　日本植民地文学精選集019【台湾編】７』監修・解説：河原功、ゆまに書房、P4

16　「烏秋」の引用は「烏秋」（『ことづけ　日本植民地文学精選集　019【台湾編】7』2000.9、監修・解説：河原功、ゆまに書房）による。以下同。

テクスト

「母の傑作」（1946.12）『万葉をとめ』京都印書館

「烏秋」（2000.9）『ことづけ　日本植民地文学精選集　019【台湾編】７』監修・解説：河原功、ゆまに書房

参考文献

（1941.11）河原功「真杉静枝『ことづけ』解説」真杉静枝『ことづけ』新潮社

（1991.1）周婉窈〈「莎勇之鐘」的故事及其波瀾〉《歷史月刊》第46期、歷史月刊雜誌社

（1994.8）葉石濤《展望臺灣文學》臺北九歌出版社

（1997.6）蜂矢宣朗「真杉静枝と窪川稲子――『南方紀行』と『臺灣の旅』――」『天理台湾学会年報』第６号、天理台湾学会

（2000.9）『日本植民地文学精選集019【台湾編】７』（監修・解説：河原功、ゆまに書房

（2003.1）林雪星『日本女性作家の描いた中国』東呉大学出版

（2005.7）高良留美子「真杉静枝が書いた台湾　陰影のあるエッセイ」『植民地文化研究』第4号、植民地文化学会

（2006.7）高良留美子「真杉静江「南方の言葉」を読む　本島人と台湾語への愛」『植民地文化研究』第５号、植民地文化学会

（2007.6）阮斐娜「目的地台灣! ――日本殖民時期旅行書寫中的台灣建構」『台灣文學學報』第10期、國立政治大學台灣文學研究所

（2008.6）李文茹「殖民地. 戰爭. 女性――探討戰時真杉靜枝臺灣作品」『台灣文學學報』第12期、國立政治大學台灣文學研究所

（2008.6）吳佩珍「皇民化時期的語言政策與內台結婚問題――以真杉靜枝「南方的語言」為中心」『台灣文學學報』第12期、國立政治大學台灣文學研究所

（2010.12）邱雅芳「殖民地新故鄉――以真杉靜枝「南方之墓」、「南方的語言」的臺灣意象為中心」『文史臺灣學報』第二期國立臺北教育大學台灣文化研究所

（2010.12）吳佩珍「台灣皇民化時期官方宣傳的建構與虛實:論真杉靜枝「沙韻之鐘」翻案作品」『台灣文學學報』第17期、國立政治大學台灣文學研究所

（2013.6）吳佩珍「「故鄉」／「異鄉」:〈女兒〉、「某個女人的生平」中的「殖民地台灣」記號」『台灣文學學報』第22期、國立政治大學台灣文學研究所

（2013.9）吳佩珍『台灣與東亞 真杉靜枝與殖民地台灣』（台北）聯經出版股份有限公司